

ヤンゴン素描 14

カマユツ駅の氷とドリアン

山形洋一

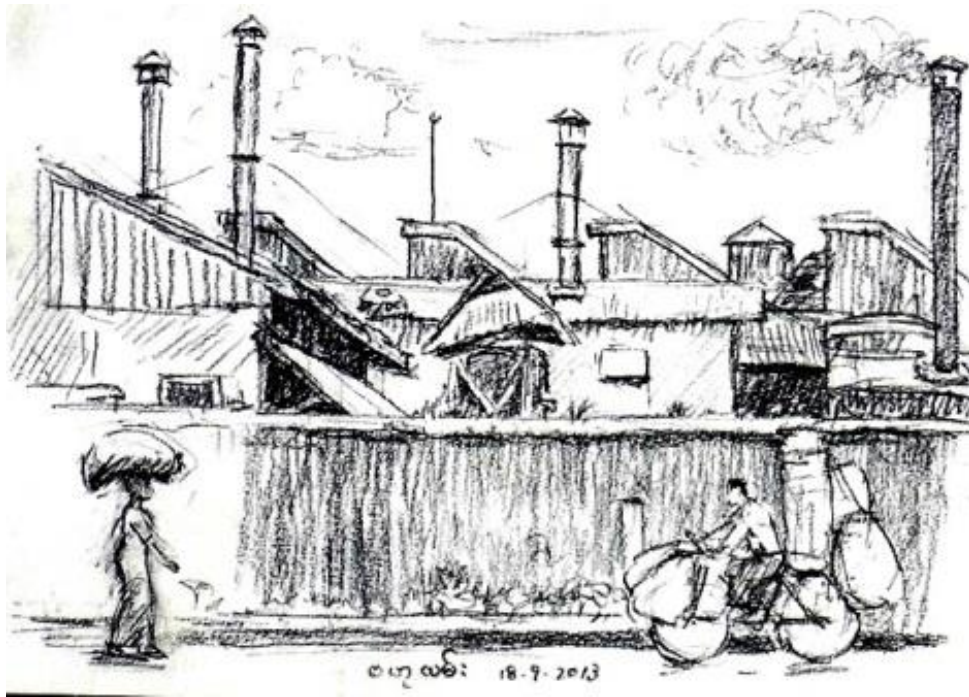


図1：カマユツ駅前の工場の塙と鋸屋根と煙突

カマユツはヤンゴン中央駅から時計回りで10番目、チミンダインから北へ3番目の駅である。

地名はモン語の「カマー」（池、湖）と「ロツ、ヨツ」（宝、宝石、ビルマ語の「ヤドナー」、もとはサンスクリットの「ラトナ」）からなり、「宝が池」の意。ただし「宝」は世俗の財宝だけでなく、仏教でいう「三宝」すなわち「仏・法・僧」も含む。駅周辺はデルタの低湿地で、小さな池や湿地はあちこちに見られるが、「宝が池」もしくは「三宝池」がどこなのか、寡聞にして知らない。

第一次英緬戦争（1824－6年）当時、ビルマ軍はここを拠点に、筏に火をつけて川に流し、下流のチミンダインに拠っていた英国艦隊を火攻めにしたという。まるで水滸伝のような戦法だが、まだ木造の帆船にたよっていた英軍にはたいへん有効だった。ライン川は潮汐がはげしく、流れが刻々変化して油断がならない。英艦隊はチミンダインを離れて下流に退避すること数度に及んだようだ。

だが第二次英緬戦争（1852年）で様子が一変する。ときすでに日本の幕末、英艦隊も「黒船」をそろえていた。鉄甲で覆われ、風に頼らず高速で動ける蒸気船の船員に、「火筏」戦法は児戯に等しく映ったことだろう。英軍は前回悩まされた飢えと病気にも十分備え、ビルマ軍を圧倒した。英領となったラングーンが国際貿易港に発展し、第三次英緬戦争で上ビルマも英領インドの属州となり、鉄道網が本格的に整備された。

1928-9年のラングーン市街地図によれば、カマユッ駅は今より約200メートル南にあった。列車の窓から注意して見ると、古いレンガ造りのプラットフォームが確認できる。その南端の踏切から東へライン市場までの道は、いまだに「ライン・ブダヨン・ラーン」（ライン駅通り）と呼ばれ、自動車やサイカー、歩行者などでいつも混雑している。開かずの踏切周辺の混乱と危険をすこしでも緩和するために、駅を北へ移したのだろう。2014年6月14日の政府系新聞「ニュー・ライト・オブ・ミャンマー」によれば、鉄道沿いの塀の修理が急務となっていて、なかでもレーダン駅-カマユッ駅間が「最優先区間」とされている。

東西に延びる「駅前通り」はにぎわっているが、鉄道の東に隣接して南北に延びるバホ道路沿いは、工場の塀がつづいて殺風景だ。どの工場も規定以上に電力を使うので、オフィスも住宅も電圧安定器をつけ、何とかエアコンを運転している。

工場の種類はさまざま、ヤンゴン市開発委員会（YCDC）の地図によればゴム、タバコ、納豆、小麦粉、麺などが製造されているらしいが、塀が高く、通りからでは中の様子が見えない。

そうした大規模な工場の裏にみすぼらしく点在するのが、水冷パイプを備えた製氷工場だ。10トントラックで氷が積みだされると、こぼれおちた屑氷を近所の子供が拾って遊んでいる。いずれも零細で地図には記載がないが、ヤンゴン市の電話帳（2012年版）によれば市内70社の製氷工場のうち11社がライン町にあるという。工場数で見ると、ラインチャー町の工業団地や、漁港のあるチミンダイイン町を上回っている。

氷はかつてヤンゴンに入植した白人男性が酒を冷やして飲むための必需品だった。当初はアメリカから貨物船で輸入していたが、1872年（明治5年）に着任した英国のコミッショナー（トップの行政官）が無類の酒好きで、地元生産を命じたと伝えられる。製氷会社が開業したのは1892年（明治25年）である。

前述のラングーン市街図によれば、1928-9年当時、市内に4か所の製氷会社があり、うち3つが白人のたむろする場所に隣接していた。すなわち①ペグー倶楽部（白人社交クラブ）とジムカーナー

(スポーツクラブ)に近い旧 **Keighly Street** (現ワーダン道路)、②中央駅や官庁街に近いスレー・パゴダ通り、③チャイッカサン競馬場脇である。くわえて④チミンダイン魚市場に近いハンターワディー駅があるが、これも「原住民」のためというより、鮮魚の輸出に携わっていた外国人業者のためだったかもしれない。

ジョージ・オーウェルの小説『ビルマの日々』(1934年)は、首都から離れた駐屯地に住む10人足らずの白人社会の息苦しい人間関係を描いた作品だが、そこでは酒に頼らねば生きて行けない男たちが、たまに補給される氷の残量に一喜一憂する様子が、ブラックに描かれている。



雨季にはカマユツ駅がドリアン臭くなることがある。駅から約1キロメートル西にヤンゴン随一の青果市場ティリ・ミンガラー市場があり、そこで仕入れたドリアンを列車で運ぶ前に、商人がささら(竹ひごを束ねたもの)でトゲの間にこびりついた泥を掃除している。

列車はバスや乗合トラックにくらべると「嵩だか」貨物の輸送に便利で、帽子、枕、造花、植木苗、空芯菜などをよく見かけるが、刺と匂いで人を遠ざけるドリアンもまた、見かけ以上に「嵩だか」な商品ということらしい。

(2015年3月21日)

図2：プラットフォームでドリアンを掃除するインド系の男

ヤンゴン素描は、ヤンゴン日本人会のホームページに連載しています。

URL は、<http://ygn-jpn-association.com/html/yangon-sketch/> です。どうぞご覧下さい。